

幼児の思考と教育 (一)



—— 幼児の自己中心性 ——

一、ピアジェの自己中心性理論

一九二一年以来、ジュネーブのルソー研究所付属幼稚園においておこなわれたピアジェの諸実験は、彼特有の「臨床的方法」によってなされたところの児童論理に関する研究であった。当時彼は二五才。これらの研究の成果は「児童の思考と言語」「児童の判断と推理」「児童の世界観」「児童の物理的因果」「児童の道德判断」などの著書として次々発表された。臨床的方法については「児童の世界観」の序文に詳しく述べられているが、簡単に説明すれば、単なるテスト法でもなければまた観察法でもなくて、それらの欠点を相補いつつしかもその長所を取り入れ、子どもと実験者が一対一で会話しつつ、子どもの会話の背後にある推理過程の下部構造を見つめ、それを解明するための会話を次々と設定していくという方法である。

仲 原 晶 子

これらの著述によって、ピアジェが彼の実験から得た児童思考の特性についてのべよう。彼は「子どもは小さなおとなではなくて、子ども自身の要求と、その要求に適応する心性を所有するものである。」というルソー以来の立場をクラバレードから受けついでいる。このような立場から当然そこに成人とは異なった「児童思考」が特質づけられる必要がある。例えば、彼によると成人の形式的推理の様式は帰納法または演繹法であるが、児童においてはこれら両者のいずれでもない様式が存在する。それは決してこれら二者の不完全なものというのではなしに全然異質なものとして、中間推理とかまたは転導推理とか呼ばれる一つの独自の様式をもつと説明している。このような児童思考の特殊性の根源に彼は「自己中心性」なるものを設定する。さきの五つの著書は、児童思考のさまざまな場面における特性を説明したものであるがいずれもそれらはこの「自己中心性」から体系づけられる。自己中心性は幼児の「自発的言語」を

手がかりとして幼児の心性を解明したものである。幼児のありのままの生活において発せられる言語を自発的言語といい、これは (1) 繰り返し返すことば (2) ひとりごと (3) 集団の中であきらかに集団を意識しているようではあるがその内容はあくまでひとりごとすぎないことば (4) 集団の中で明瞭に他者を意識した会話 (5) 他者の仕事や行動についての批評 (6) 命令、要求、威嚇 (7) 質問などにわけられる。この中で(1)から(3)までを「自己中心性言語」(4)から(7)までを「社会性言語」という。自己中心性言語が幼児の自己中心性の現われであることはもちろんである。ここから得た結論は、言語による交通がようやくできるようになる三才頃すでに自己中心性言語は全体の五〇〜六〇パーセントで四才、五才、六才と順次自己中心性言語は減少し、七才をすぎると遂に自己中心性言語は自発的言語全体の四分の一以下になると説明している。

このように三才から七才までの自己中心性は幼児期特有のものでこれが幼児の思考特質の全面をおおっている。具体的にいえば「児童の世界観」の特質としてあげられる「実在性」「汎心性」「人工性」もこの自己中心性から展開するものであり、さきに述べた「中間推理」とよばれる思考様式もまたここからの発展として説明できる。なお、これらについては次号の「幼児の道徳的実在性」「幼児の判断および推理」によって詳述する予定である。

二、実験および自己中心性系数

自発的言語を手がかりとして、幼児の自己中心性の程度を実験し

たピアジェの方法で、学生の協力を得て私がおこなった実験は以下の通りである。

一、日時 昭和三年六月八日ないし一三日間を任意に決定し、午前九時から一時まで二時間

二、対象 宝塚市私立T幼稚園児 四才から六才 男女 八名

三、実験者 関西学院大学教育学科三年度生三二名

四、方法 幼児一名を四名の学生が受け持ち、二名ずつ交代で記録をとった。

五、結果

児童名	性	年 令	実験日数	語 数 発 総	平均 一日 発語数	系 数
K.	男	4年6月	12	467	38.9	0.6
I.	女	4年6月	8	656	82.	0.55
O.	女	4年7月	13	297	24.7	0.51
O.	女	4年7月	12	136	11.	0.49
M.	男	5年1月	13	1219	81.2	0.54
N.	女	5年6月	12	688	57.3	0.36
Y.	女	5年11月	12	436	36.3	0.38
Y.	男	6年2月	12	1624	135.3	0.43

なお毎日の記録をY男についてあげてみると以下の通りである。

第○目	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.	11.	12.
発語数	161	190	282	156	160	65	57	168	104	89	86	106
系数	0.37	0.53	0.34	0.32	0.45	0.69	0.49	0.47	0.48	0.22	0.36	0.48

系数とは自己中心系数であって自己中心性言語の全自発的言語に対する割合である。

$$\frac{\text{自己中心性言語(1)から(3) 自発的言語(1)から(7)}}{\text{}} = \text{自己中心性系数}$$

この自己中心性系数をもって自己中心性の指標とする。

三、幼児の思考特質としての自己中心性

この資料にもとづいて幼児の自己中心性なるものを更に具体的に説明しよう。一つの保育室内でまたは遊び場で約二〇名の幼児が二、三名または四、五名ずつ群れてさまざまな作業に従事している。幼児は「集団」という、現実には社会的状況におかれているわけである。子どもたちは身体を動かすと同時にしきりにおしゃべりをしながら作業にいそしんでいる。大声を発することもあれば口中でのつぶやきもある。がとにかくこのおしゃべりの記録がさきの実験結果である。ことばはまさに心性の表現である故にこれらの自発的言語からその時の彼らの思考の構造を探り当てることができよう。このおしゃべりをさきに述べた七種類にわけると (1) くりかえし (2) ひとりごと (3) 話しかけの形式であつてもその場の客観状勢からみて社会性のないことば、したがって話しかけた対象もはっきりしない相手も反応をしない、また本人も当然反応を期待してないというようないひとりごとと類することば。

これら三種類のことばの全体に対する割合が四才で平均〇・五四、五才で〇・四三、六才で〇・四三というわけである。これとは全く対象的におとなは、それがたとえどんなに個人的な仕事であつても、その仕事に従っている限りそれを常に社会的な背景の中で考えようとする。すなわち社会的心像をもつことによつて他人に理解されようとする。また、さきの幼児の場合のような社会的状況に

おかれても幼児ほどおしゃべりはしない。が発せられることばはかならず社会的なものであるに違いない。もしおとなが集団の中で幼児のようによくしゃべり、それがまた全くひとりごと的なもので社会性のないことばであつたとしたらどうだろうか。おとなにとつてはことばは他者との交通の道具としてしか使用されないが幼児は事情を異にする。幼児にとつてことばはまさに一種の運動であつて、それが全く個人的なひとりごとであることに何ら問題はない。ただひとりごとと表現される「自己中心性」に幼児期の問題が存在するわけである。

自己中心性というのは、「自己中心的」とか「利己的」とかいうような自己を意識する一つの意識現象ではない。自己の意識はもはや自己中心性ではありえない。なるほど幼児はしばしば自己中心的な行動をする。がそれは少し注意深く観察されるなら青年期の特性である自己中心的な行動と異なつたものであることに気付かれるであらう。行動はもちろん間接的には自己中心性のあらわれである。が決して行動が自己中心性を構成するものでないことはあきらかである。自己を意識することは同時に他者の意識でもあるが、幼児の場合にはこれら両者の明確な意識をもたない。友だちが転んで泣けば自分も同じように痛くなって泣けてくるのがそれだ。故に自己中心性というのは自他の意識というようない一つの意識現象ではなくて、それはむしろ成長した人格が所有し得る客観的知的態度の基礎となる無自覚的な包括的なもうろうとした知的態度の全体を指す。故に自己中心性は全く知的な基盤の上で考察されなければならないもの

である。こう考えてくると自己中心性は幼児が物を認識するその認識のしかたにかかわってくる。幼児は狭小な生活領域の中で自己をとりまく世界を認識する場合、自己中心的な立場からすべてを自己の立場に同化してしまつて客観的なものを見失ひ、またある場合には逆に意識的な自己の自覚ができないために、他者と自己を混同して模倣をする。外界を一方では同化、一方では模倣という二つの両極端のやり方で認識し、これら二つが絶えずくりかえされているのこそ、自己中心的思考に外ならない。このように自己中心性は客観的知覚の態度の前段階として幼児の成長の過程に重要な位置を占めているが、自己中心性の解除がおこなわれない限り、客観的知覚の態度の形成は不可能である。つまり幼児の思考特質としての自己中心性のなかでは、外界の客観的把握もできないし、また形式的推理も不可能である。それでは自己中心性は何時頃、どのような手続きによつて、その構造を解体していくのであろうか。

四、脱中心化における諸問題

この実験では六才児は一名だけの資料しかないが、道徳判断に關する実験から推定すれば、自己中心性系数は六才で○・二、七才でほぼ零になる。ピアジェの場合は七才で○・二五以下であつた。故に自己中心性は七才かおそくとも八才になればほとんど解除されるわけである。この自己中心性の解除を「脱中心化」という。七才八才になると児童はグループの一員として自己の生活領域を拡大

し、そのために種々の事物との接触や他者とのふれ合いから幼児期以来の自己中心的なやり方が通用しなくなることを知るようになる。ここで幼児期の思考は合理化への一步をふみ出す。自分の行動の範囲が拡大し、ために他者との種々の接触がおこり、また多くの事物の処理を必要とするようになる、ここでは当然自己と他者との区別が除々に明瞭となり、そこに關係を把握することや秩序を確立する必要にせまられ、幾度か失敗を繰り返さずつつ苦勞して自己の思考を「通用しうるもの」へ変化させていく。自己中心性の社会化である。こうしてまず少なくとも現実的で具体的、しかも特殊の絶対的な行動の場ではよほど合理的な思考もできるようになる。しかしながら合理的とはいへ、それはあくまで個別的にして絶対的な場においてだけであるところに幼児期の情緒性をみることが出来る。以上のことから自己中心性は分化や社会化の過程を経てまず第一段階として、具体的で特殊のかつ絶対的な行動の場においてその解除がおこなわれることが理解できる。思考を経験的思考、論理的思考に區別するなら行動の場はまさに前者である。この二つの思考は発達のみにて決して同時に存するものではなくて、常に幾らかのずれをもつて發達していく。つまり「遊び」というような行動的でも具体的特殊な経験的思考では七才八才で自己中心性を解除しなくても、第二段階の抽象的普遍的な場における「判断」というような論理的思考に關しては、十一・二才まで完全な脱中心化はおこなわれない。これはちやうど、認識の問題において具体的經驗的に認識することができて、一般的論理的場においては不可能だ

というそれである。第一段階の認識はやがては第二段階の認識を可能にするものであるが、それ故にこそそこに、ずれがある。一口に自己中心性の解除といっても自己中心的思考の構造が解体されるためには、児童は必死の努力を傾ける。児童がいかに苦心してこれを成し遂げるかということとは、脱中心化の過程に生ずる思考の混乱がこれをよく物語っている。例えば小学生に臨床法によつて事物の判断に關して会話を進めていくと、おそらく首尾一貫した合理性を供えた解答はえられないで、ある時は幼児的であり、またある事に関するは客観的知的態度を供えており、しかしそれも確固としたものでなくて薄弱であり、またある場合は両者のいずれでもないというように、心的構造は支離滅裂である。俗に「わかっているようでわからない」といわれる子どもの状態はこれを如実に表現している。このように困難な自己中心性の解除を、小学校六か年間の教育過程であると考えるなら当然その教育方法もここに位置づけられねばならない。と同様に、幼児期の教育は第一の段階における自己中心性の解除のために準備されなくてはならないであらう。

五、教育方法上の問題

幼児の全般的な思考特質は自己中心性であり、したがってその教育は当然この特質に向けられねばならないというのが私の結論である。そして自己中心性は発達のプロセスに必要かくべからざるものであつて、しかも同時にこれは解除させるべきものである。自己中

心性の解除は自然発達のものだけによつてできるのではなくて、それを社会化することによつて自己中心性は分化し、その解体が可能となる。前節で述べた脱中心化の手続きを促進させるべく分化や社会化への配慮によつて教育方法が展開されるなら、幼児期の「遊び」の段階における自己中心性の解除は達成されるはずである。

先ず生活領域が狭く限定されているのであるから、領域を拡大する意味でその中で豊富な環境を準備し、経験を豊かにするための配慮がのぞまれる。歌、お話、作業、紙芝居、幻燈、何でもよいから眠っている子どもの心性を覚醒させ種々な体験の中へ幼児を没入させる。自己中心性の社会化である。次には現実的・具体的な場で自己を反省させ、また他者を観察させて自他の区別を知らせる。何よりも「遊び」の中でよいから考える習慣をつくることだ。物事を処理するのにその場限りの行き当りばったり幼児特有の情緒性にのみ訴えることをやめることだ。自己中心性の分化である。これはやがて具体的な場では合理的に思考できることへ発展する。自他の区別がどうにか可能になれば、普通自己から他者へさらに一般的物へ及ぼす思考を今度は一般的物——他者——自己へ及ぼすことができるように訓練する。個別的場における思考の可逆性の確立である。訓練によつてこれが可能になれば「もし……であるならば」という形式で考えをすすめることができるようになる。いいかえれば具体的に、個別的場をはなれて一般的場における思考が可能となる。これが第二の段階における自己中心性解体の唯一の手がかりとなる。